

# Café Emartin

## ~ menu ~

May 5th, 2007 (Sat)

Open 13:30

Start 14:00

Close 15:30

@ Salon de Passage

## 1. 練習曲 第 12 番 「革命」 Op.10-12

F. F. ショパン

務川 重之

<Allegro con fuoco (速く、火のように熱烈に)>

革命のエチュードは、1831年、ポーランドのワルシャワで起こった革命が、ロシアの介入によって鎮圧された時に作曲されたと言われています。当時のポーランドは、ロシアをはじめとする大国による支配を受けており、ポーランド人のショパンにとって、この革命の失敗は大変な悲しみと憤りをもたらしました。この時、ショパンはウィーンからパリへ向けての旅の途中であり、病弱な体質から革命に参加できなかった悔しさも加わり、このような苛烈なエチュードが作曲されたのでしょう。

乾坤一擲。演奏会の始めを飾るに相応しく、強烈なインパクトで演奏できたらと思います。

## 2. 練習曲 第 3 番 「別れの曲」 Op.10-3

F. F. ショパン

務川 重之

<Lento ma non troppo (遅く、しかし度を越さないで)>

1832年、ショパン 22歳の頃の作品です。1934年のフランス映画「La Chanson de L' Adieu(邦題：別れの曲)」という映画でこのエチュードが用いられていたことから、日本では「別れの曲」という題で知られるようになりました。映画の内容は、ショパンと同じワルシャワ音楽院のソプラノ歌手コンスタンツィア・グワトコフスカとの悲恋の物語です。しかし、19歳の頃のショパンがコンスタンツィアに恋心を寄せていたことは事実ですが、実際には、ショパンは彼女に告白しませんでした。ショパンの死後、彼の恋心を伝えられたコンスタンツィアは「ショパンって誰だっけ？」と答えたそうです。

曲は3部形式で、第1主題は、ショパン自身「これほど美しい旋律をこれまで書いたことがない」と言ったように甘く叙情的です。一方、中間部は対照的に華麗な盛り上がりを見せます。曲構成の対比の面白さを伝えられるように弾きます。

## 3. 通奏低奏と3声のバイオリンによるカノンとジーク 二長調より 第1曲 カノン

J. パッヘルベル / 和田則彦・牧島信吾

牧島 信吾

J. Pachelbel (1653-1706) によって作曲されたとされる、「通奏低奏と三声のバイオリンによるカノンとジーク」の第1曲は、「パッヘルベルのカノン」などと呼ばれ、幅広く親しまれている名曲と言えます。美しいメロディーと共に、伴奏の和声(コード)進行が、あらゆる時代・ジャンルで見られるものである点も、この曲が幅広く親しまれている理由でしょう。

しかしながら、この曲が「一度の平行カノン」(しかも三声)という極めて厳格な、いわば「輪唱」の形式で描かれているということは、曲の知名度のわりには知られていないように思います。また「カノン」という形式を維持していない編曲も、多く存在するのも事実です(なのに「カノン」と名乗っている…)。

原曲は、3つのバイオリンによる「カノン」ですが、あらゆる楽器との相性が良いのも、この曲の特徴でしょう(尺八3本による「カノン」なんて録音もあって、良い感じ)。当然、ピアノとも相性は良いと思いますが、一方でこの曲の「カノン」という形式をピアノで示すことは、極めて困難なことであると言えます。私はこの曲の「カノン」という構成に魅せられ、そしてピアノ部に入部し、いつの日か自分なりに「カノン」という構成によるこの曲を、ピアノで演奏したいと思い続けてきました。

2本の手で、伴奏+メロディー3本を奏でるという、極めて困難な無茶をするわけであり、技巧・表現共に必ずしも満足するものではありませんが、8年間思い描き続けてきたものとして聴いていただければ幸いです。

#### 4. La dispute

Yann Tiersen

佐々木 貴弘

映画「アメリ」のオープニングで使われた曲。少しけだるい現実感と不思議な世界への入り口を表現できれば。

#### 5. 「鏡」より 「道化師の朝の歌」

M. ラヴェル

梶川 佳美

鏡という題にも見られるように作者の内面が描かれています。変だけど気になる曲です。グリッサンドの最後の音が気に入っています。

#### 6. 「映像」第1集より 「水の反映」

C. A. ドビュッシー

今村 綾子

さかのぼること四年前、学部二年の夏コンにこの曲を一度弾きました。自分に「しっくり来る」というのが、その時の感覚でした。そのとき、この曲はおばあちゃんになっても弾いていたいな、とひそかに思ったものです。

そして今、この曲のイメージは当時と変わっているところもあり、変わらないところもあり。どう変わったかは私にも良く分かりません。奏でられた音がその答えとなっているのでしょうか。この曲を弾くとき、私は二つの違う存在になりたい。私は何にも縛られることなく自由にかたちを変える水であり、その水を私は客観的に見ている。異なるものが共存したとき、この曲が成り立つ。いかにそのイメージに近づけるか…。そんなことを思いつつ、この曲を演奏します。

#### 7. 25のやさしい練習曲 第2番 イ短調 「アラベスク」 Op.100-2

F. J. F. ブルクミュラー

務川 重之

<Allegro scherzando (速く、戯れるように)>

ブルクミュラーはドイツのピアノ作曲家・教育者で、25のやさしい練習曲は1851年にブルクミュラーが45歳の時に作られました。日本においては、ピアノ教育上、とても優れた曲集であると考えられています。アラベスクはアラビア風の蔓状の装飾模様を思わせる技巧的な曲を意味します。16分音符による特徴的なリズムがエキゾチックな魅力を醸し出します。

#### 8. パリの休日

W. L. ギロック

務川 重之

<Gaily; whimsically (陽気に、気まぐれに)>

ギロックはアメリカのピアノ教育者で、作曲においては「音楽教育界のシューベルト」と呼ばれていました。これは彼の作曲がとても美しいメロディを持っていたことから来ていますが、この「パリの休日」も下降する左手の伴奏にコロコロと可愛らしく回転する右手のメロディが美しい秀作です。

9. 6つの古代の墓碑銘 第1曲「夏の風の神, パンに祈るための」  
第3曲「しあわせな夜のための」  
第6曲「朝の雨に感謝するための」

C. A. ドビュッシー

primo 梶川 佳美 second 今村 綾子

宗教的、回顧的で、自然への感謝をうたった曲です。とはいえ、お互い必死なので、弾いているときは無心です。今回は、みなさんに感謝を込めて演奏したいです。

10. 8つの練習曲 第4番 嬰へ長調 Op.42-4

A. N. スクリャービン

本山 悠輔

この曲はとても美しい旋律で構成されており、練習曲らしくない練習曲です。私の演奏でみな様の心を暖かくできたら幸いです。

11. バラード 第1番 Op.23

F. F. ショパン

筒井 一貴

農工大ピアノ部に積極的に関わっている人間の最長老となって久しい。現役生にしても卒業生にしてもピアノとの関わりは人それぞれであるが、大学入学当時と驚くほど変わって（変わり果てて？）しまう輩がいるかと思うと、変わらないような気がするが実は本質が変わった（化けの皮がはがれた）輩あり、個性を十分に伸ばした（より个性的になった）輩あり、それはそれは多彩な人間模様が繰り広げられる。今回の演奏会、その中でも選りすぐりの（＝特別にトンデモナイ）連中の集まりであるが、その中で唯一マトモなのがこのワタクシ。くれぐれも誤解なきようお願いしたい

Café Emartin とは  
東京農工大学ピアノ部員と卒業生の有志により結成された団体です。  
定期的にコンサートを行っています。

本日はご来場ありがとうございました。アンケートにご協力ください。  
次回のコンサートは未定ですが、下記 Web サイトで随時案内させていただきます  
また、東京農工大学ピアノ部のコンサートは、7月8日（日）  
府中グリーンプラザけやきホールにて開催いたします。  
曲目等は Web サイトをご参照ください。  
ご来場お待ちしております。

Website URL

Café Emartin <http://cafeemartin.the-ninja.jp/>  
TUAT Piano club <http://www.tuat.ac.jp/~piano/>



(C) 2007 Café Emartin

また会える日を！チャオ！